

新刊

□小笠原左衛門尉亮軒（編）：**江戸時代園芸植物刷物集巻1**（付録共）. 26.5 × 18.5 cm. 2012. ¥15,750（税込）. 名古屋園芸. ISBN No number.

磯野直秀博士の本書序文にあるように、江戸時代の園芸研究に欠かせないのが化政年間に現れ、以降も頻繁に登場した名寄せ（鑑），見立て等の一枚刷り印刷物である。

江戸時代の園芸史研究での一枚刷りの重要性を指摘したのは、日本の博物学史や園芸史研究の先駆者であった白井光太郎だった。博士旧蔵書の大半は没後に帝国図書館（現、国立国会図書館）に購入されたが、一枚刷りの多くは選に漏れ散逸した。編者、小笠原左衛門尉亮軒は雑花園文庫を開設・主宰し、江戸時代の園芸書の収集に努めてきた。同文庫の一枚刷りコレクションは世界最大規模のものであり、本書の編集と復刻はそのコレクションにもとづいている。巻1は「オモト」と「桜・松名木集」を収める。これらの刷り物を眺めるだけでも、江戸時代のオモトへの熱い息吹が伝わってくる。

附録は索引を兼ねた名彙といってよい力作で、オモトについては50音順と出現年次別頻度表、松と桜では50音順と国名50音順索引を載せる。収蔵する一枚刷りを復刻のかたちで公開した編者の英断に感謝したい。特にオモトでは本書は今後の園芸品研究に必携の文献となるであろう。

（大場秀章）

□秋月俊幸（編）：**書簡集からみた宮部金吾—ある植物学者の生涯—**. 2010. ¥4,700 + 税. 北海道大学出版会. ISBN 978-4-8329-6719-9.

本書は宮部金吾（1860–1951年）が終生大切に保管していた約3千通の書簡を来信者別に配列し、内容の一部を要約した目録である。宮部博士の多方面でのご活躍は有名だが、植物分類学および植物病理学分野での活動は、単に博士の業績の根幹をなすというだけでなく、日本での両分野の発展にも大きく関与するものであり、学術史の面からも深い関心を引くものである。

本書が収載するのは、1990年に宮部家から北海道大学に寄贈された書簡、および北海道大学農学部が所蔵していた書簡である。編者はそれらを4部と付録に分けて、本書を構成した。第1部は東京英語学校・札幌農学校初期の14人の旧友

からの書簡、2部はその他311人の日本人からの1393通の書簡、3部は約100人からの206通の絵葉書、4部は326人の外国人からの1006通の書簡、附録はマキシモウィチ氏生誕百年記念会に関する60人からの98通の書簡等である。

本書は、収載される全書簡についてその要約を記すのみで、本文はまったく掲載されていない。しかし、要約では、来信者の生没年や略歴等が紹介され、宮部と来信者との関係や交流の度合いをある程度は推し量ることができるように工夫されている。この要約部分が、本書を単なる資料集の枠を超え、来信者の目を通しての宮部の人間性や距離感などを読者に伝える役割をはたしている。また、マキシモウィチ氏生誕百年記念事業のように他の文献等から結果の一部が知られている事象では、そこにいたる経緯などが垣間見え興味をそえられる。

3千通の書簡すべてに機械的に要約を付すだけでも労力が要る。しかも、本書の場合は、個々の書簡を精読しなければ書きえないだろうと解される、要点を押さえた要約が付されている。それに要するぼう大な作業をおそらく編者は独り黙々と続けてきたにちがいない。編者の労にまずは感謝したい。

（大場秀章）

□ Brigitte Hoppe (Herausgegeben): **Engelbert Kaempfer Werke, Band 3. Zeichnungen japanischer Pflanzen**. 1005pp. 24.5 × 17.5cm. Iudicum Verlag, München. ISBN 3-89129-933-8.

日本の自然・文物について最初の包括的コレクションと研究を行ったエンゲルベルト・ケンペル（1651–1716年）への学術諸分野からの関心が高まっている。植物コレクションについても同様である。現存する彼の植物関係資料は大半がロンドンの自然史博物館のSloaneコレクション中にある。

本書は同コレクション2914として保管されるケンペルの217葉の植物画すべてを復刻し、描かれた植物の同定と関連の分類学ならびに民俗学的研究の成果をまとめたものである。編者のHoppeの他、Petra-Andrea Hinz, Ursula Holler, Wolfgang Michelが協力している。協力者のHinzは2001年にSloane・コレクション中のケンペル採集植物すべてを同定した(Bulletin of the Natural History Museum, Botany, vol. 31, 27–34 pp.).

ケンペルが描いた植物画として知られている

のは Joseph Banks によって出版された *Icones selectae plantarum* (1791 年) である。標題中の *selectae* (選択される) の意味が本書で復刻された 217 点の植物画をみることでよく理解できる。*Icones* に収められた植物画、例えばモクレンは原画 (fol.45 recto) の忠実な版刻であったことがよく判る。*Icones* には収載されなかった作品中にも詳細な観察を経て描かれた精緻なものが数多く、改めてケンペルの観察者・画家としての才能に目を見張った。

本書は画作された植物の日本国内での分布や和名について、『日本国語大辞典』など日本の研究者は引用を躊躇するような文献も駆使し考究されている。今後の日本側研究者からの批判研究が望まれよう。(大場秀章)

□ 邑田 仁 (監) 米倉浩司 (著): **日本維管束植物目録**. B6. 379 pp. 2012. ¥3,800+ 税. 北隆館. ISBN 978-4-8326-0970-9 C3045.

著者は先に、DNA 塩基配列に基づく APG 分類体系による「高等植物分類表」によって、わが国の高等植物フロラにかかわる属以上の分類群の新たな系統関係を整理解説した。本書はそれに続いて、わが国に産する維管束植物のすべてについて、その学名と和名を、前記の体系に従って示したものである。これらの基になったデータは、著者と梶田忠氏が協同で作製し、日本植物の学名・和名データベースとして今や定評ある YList である。

目録は APG 体系に配列した科の中で、わが国に知られる品種以上の分類群が、学名の順序に配列されている。学名は正式発表でなくても、一件しかなければそれがコメントつきで示されている。雑種については、和名が与えられたもののみを示す。和名の綴りは新旧折衷のようだ (例: マイヅルソウ)。和名が複数ある場合には、著者が選んだものの一件のみを先頭に置き、他は括弧でくくって示されている。それぞれの種類には、固有、絶滅危惧ランク、帰化、逸出、栽培などの記号がついている。

本書は専門研究者ばかりでなく、アマチュアの人達に広く使われることだろう。主な用途は「この植物の『正しい』学名はなんだろう?」そして同じ植物に対して和名が複数ある場合、「どれを正式和名として選んだらよいか」という判断材料にしたいだろう。このためには、まず和名索引 (約

17,000 件) からその学名を探ることになる。

多くの場合、対応する頁は一つだから、探索は容易である。しかし出現頁が二つも三つも示してある場合も少なくない。最も多く現れるのはエドヒガンとタヌキランの各 6 件である。ほとんどの場合、これらは雑種の片親として表示されたものだが、和名索引ではそういう区別は示されていないから、ユーザーはどの頁を見るべきか迷うだろう。だから、本命の出ている頁番号以外は、字体を変えて表示しておけば、探す手間が省けるのではあるまいか。

ミヤマゼキショウの学名を知るために和名索引を引くと、43 頁右と 64 頁右が示されている。43 頁右には *Tofieldia coccinea* var. *gracilis* (著者名省略) が該当するが、和名の表示はハコネハナゼキショウ (ミヤマゼキショウ) となっている。この括弧の意味は、ミヤマ... とハコネ... は同じ植物であり、ハコネハナゼキショウが本書での正名であることを示している。この括弧の説明は凡例にはないので、常識的に解釈する。調べたい植物は *Tofieldia* ではないので、もう一つの 64 頁右を見ると、*Juncus prismatocarpus* subsp. *leschenaultii* が該当するが、その和名はコウガイゼキショウ (ヒラコウガイゼキショウ, ヒゼンコウガイゼキショウ [EN], ヒロハノコモチゼキショウ, ヒロハノコモチコウガイゼキショウ, ミヤマゼキショウ [CR]) と示されている。これがこちらが期待した答になるのだが、この表現では、ミヤマゼキショウは括弧内に示された他の植物名と共に、コウガイゼキショウと呼ぶべきものという著者の見解が示されたことになる。そうすると、[EN] や [CR] を冠せられたコウガイゼキショウを、著者はどのように扱うつもりなのだろうか? 『地域的に「ヒゼン」とか「ミヤマ」とか呼ばれているものには [EN] とか [CR] とか評価されるものがある』と言っても、それらが学名で示されないようなものなら、地域植物誌や環境評価などの場に混乱を招くだろう。括弧でくくったことについて、説明が欲しい。

Paederia foetida L. ヘクソカズラには七つもの「異名」が括弧の中に並んでいるが、註記によると、ヘクソカズラの多くの変種や品種のうち、*P. foetida* L. の下に正式に組み替えられているものは、コバノヘクソカズラ (*f. microphylla* (Honda) Tsukaya, Imaichi & J.Yokoy.) のみであると言い、「本書ではこれ以外に種内分類群を区別しないが、

いくつかの型は品種ランクで認められるものと思われる」と記している。著者は種内分類群を暗に認めながら、本書の刊行を急ぐあまり、前もってやるべきことを後回しにしてしまったのではないか？だから括弧内に示された和名は先頭の和名で代表されるとは思わぬ方がよく、ユーザーは本書に頼るわけにはゆかず、自己の判断で、あるいは他書に頼って名前（学名でも和名でも）を使い分ける必要がある。著者は独自の判断で、学名の合法性とランクを評価し、必要な場合には学名を与え、さらにそれと和名を結びつけること迄を、本書でやるべきだったのではないか？リンドウ属では、品種レベルの名前がたくさん拾われているのに比べて、グループによって評価が偏っているように感じられる。

データベース検索では、得た結果をどのように判断し扱うかは、ユーザーに任されており、作者は関知しない。そのために作者は、思いついた時に、誰に断ることもなく、「自分の」データを書き換えられる。しかし文献となると、示された結果については著者が責任を負わねばならず、読者はもちろん、著者自身でも勝手に書き換えるわけにはいかない。

本書には学名整理の都合上、未発表の裸名が（たぶん）47件あり、それらには記号†が付けてある。これらの裸名は、別途正式発表の予定とのことであるが、そういうことは、本書の中でも可能だったのではないか？また、和名の「新称」が（たぶん）22件ある。多くの場合は同名異品だったり他に紛らわしい名前があったりするため、それぞれの場所には註記されていることが多いが、凡例では触れられていない。せめて和名索引で、それが分かるようにするとよい。和名索引の頁数表示は、右詰めの方が見やすかったと思う。

著者は本書を刊行した以上、早急にこれらの残された問題点を解決し、ユーザーが頼りにできる目録を、もう一度作ることが求められる。

ほとんどの奇数頁の最後に、その見開き2頁に現れる植物名についての註記があり、著者の見解が述べられている。本文には*印と一連番号により、どこにあるかが分かるようになっているが、同じ番号の註記が複数あったり、他の頁にも現れたりすることがあるので、見落とさぬよう注意する必要がある。

本書はコンサイス的な利用が最も多いと思うのだが、綴じがキツくて開いて置けず、綴じに近い

部分の文字や註記記号は見落とし易い。値段との釣り合いがあるだろうが、紙質や製本について、出版社の配慮が望まれる。

分類表に続いて、いち早く本書を意図された著者の努力は高く評価される。私はインターネット社会に加われず、YListの恩恵に浴する立場にいないけれど、他でも言及しているように、検索的利用という面からの電算機データの便利さは、この上ないものと思っている。しかしデータが常時更新あるいは変更されるという点に、不安（敢えて言えば不信）を感じている。だからある時点で全体を見渡し、それを固定したこういう「ブツ」がときどき作られて、内容の変更ができない形で保存されることも、また必要と思う。本書はYListを「ブツ」として固定する絶好のチャンスなので、もう一段の努力を期待する。それには、ヘクソカズラの項で述べたような問題を、著者の判断で一つ一つ解決してゆかねばならない。それも、今のような事態なら急いで... YListに集積されたデータが、有効に利用されることを期待する。こういうことは言うだけなら易しいが、実際には該当する名前を探し出し組み換えて、一つ一つ著者としての自分の名前を付けるという、ものすごくシンドイ作業であることは承知しているが...

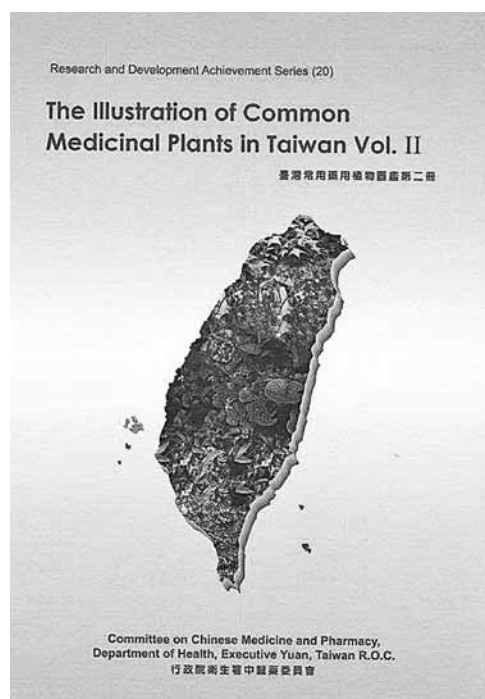
原 寛先生の日本種子植物集覧は、未完に終わってしまった。本書をはじめYListのデータを用いて、集覧の完全版ができないものだろうか。原先生に「集覧の続編を作られないのですか？」と尋ねたことが二度あるが、返事は「しないよ」という、そっけないものだった。協同製作者の予定だった前川文夫先生が、その後の病気のために、執筆が望めなくなったことも一つの理由だろうが、苦勞して作った集覧が、後輩どもの原典探索に役立つよりは、原典孫引きの材料にされがちなことに、満たされないものを感じておられたように思う。今日では、自己の作品の利用法について、「こうしてくれなくては...」と注文をつける著者は少ないだろう。進行中のFlora of Japanと平行して、新しい分類体系に沿った集覧ができるとよいのに、と思う。

なお以前、著者の高等植物分類表や大場秀章氏の植物分類表を紹介した際（本誌85(2):133）、「この分類表の順序に標本を配列しようとする標本室は、たとえ新設の機関でも現れないのではないか」と書いたが、2012年4月に国立科学博物館の自然史部門のすべてが、筑波実験植物園構内に新築

移転した際、植物研究部の維管束植物標本室では、早くもこの配列を採用した。植物研究部はこれに先立って1995年に筑波へ移転しているが、従来の標本室では旧配列を維持しているので、二つの方式が併存する形となった。1995年の植物研究棟建設に当たっては、コンパクターを最大限有効利用するために、5階の標本室は壁のないプチ抜きの構造にした。強度計算では耐震性はパスしていたが、2011年3月11日の東日本大震災で、どうなったかと心配した。幸に建物のダメージはなかったとのことである。ついでに紹介すると、今回の新館植物標本室では、三枚のガラス引き戸を備えた新案のおしば標本棚を用いている。新しい試みなので使い勝手はまだわからないが、引き違い戸を設ける都合で、3列のうち中央の棚幅が広く取っており、押し葉が保護カバーごと左右にズレるので、これが何か問題の元になりはしないかと思う。引き違い戸という構造も新機軸なので、今後いろいろと改良案が出ることだろう。私が提案したフォーカルプレーンシャッター式標本棚(本誌85(1):65)は、アッピールしなかったようだ。(金井弘夫)

□ Tseng-Chieng HUANG and Yuan-Shiun CHANG (eds.): **The Illustration of Common Medicinal Plants in Taiwan Vol. II.** A4. 467 pp. 2011年11月. Committee on Chinese Medicine and Pharmacy, Department of Health, Executive Yuan, Taiwan R.O.C. [行政院衛生署中醫藥委員會] ISBN 978-986-02-9635-8. NTD 1500.

本書は2002-04年に刊行された台湾の代表的な薬用植物図鑑の一つである謝文全(編)「台湾常用薬用植物図鑑 全3巻」の英語版である。台湾の薬用植物資源を国際的に紹介する目的で英語版として刊行された。ここに紹介するのはその第2巻で2011年11月に発行された。第1巻は2009年に既に発行されており、第3巻は2012年末に刊行を予定している。この英語版も台湾行政院衛生署中醫藥委員会で作られ、黄増泉教授(植物学)と張永勳教授(薬学)とによって編集された。黄博士は長らく台湾大学理学院植物学系で植物分類学教授であったが現在は同大名誉教授、Flora of Taiwan (1975-79)とFlora of Taiwan 2nd edition (1993-2003)の中心となって計画を進め、両フロアを刊行された。張博士は謝教授の後継者で、中國医薬大學中國薬学研究所教授。



本書では中国語版と同じく3巻に分けて1200種類の普通薬用植物が取り上げられる。旧書の学名を正し、カラー写真の多くを代え、薬学的記載を改訂したという。学名や植物学的記載はFlora of Taiwan 2nd editionに基づき、薬用植物の情報がよくまとめられている。1種について1ページを当て、学名(中国名)、英名、分布、形態、含有成分、薬効を記述し、カラー写真が付く。この第2巻には86科436種が含まれ、スイレン科から始まりリンドウ科までに至る。ほぼエングラータ体系順である。マメ科(83種)、バラ科(27種)、アオイ科(25種)、ミカン科(22種)、セリ科(21種)の種数が多く、亜熱帯の種が多い。

台湾の各地で街中に漢方薬の薬局があり、市場では生薬の原料を売る店がある。生薬屋には実に多様な生薬材料が並んでいる。希少種タイワンミヤマトベラを採集するために探していたときに台北市内の生薬屋で「山豆根」として沢山売られていた。日本では漢方薬の原料を売る店はふつうには見られない光景で、生薬が台湾の人々に広く利用されていることを窺わせる。台湾植物の薬用資源としての価値を知るのに有用である。

(大橋広好)